

我が青春の思い出

宮城県 尾形 道

一 満州行きを決心するまで

私は、明治四十五年七月六日に、宮城県遠田郡南郷村の農家に生まれた。私が生まれて間もなく、母は産後の肥立ちが悪く心臓病で亡くなったので、その後は義理の姉のお乳で育てられた。それから、長兄を「とうちゃん」、義理の姉を「かあちゃん」と、小学校に行くころまで呼んでいたようであった。

大正八年の四月に小学校に入学、大正十四年三月に卒業した。勉強が好きだったし、家の経済状態も許されたので、南郷国民高等農学校に入り、昭和三年三月に卒業した。その後は家で農業に従事し、兄たちと力を合わせて一生懸命に働いていたが、実父が五十過ぎの若さで倒れ、床に就いてしまった。それからは、夜の付添いは私の役目となり、毎晩、看病に努めていた

が、看病のきいもなくとうとう亡くなってしまった。青春時代の悲しい思い出の一つである。

南郷の我が家と、志田郡松山在の尾形家とは親戚関係であったが、両家に水田管理をする男がいないので、私に南郷と松山の両方の水田を管理するようにと長兄から言われて、その仕事もしていた。

当時、長兄は県内でも有数な篤農家で、初代の南郷高農校の校長さんが生徒を連れて、苗代のあげ床作りの実習に我が家の田圃に来たものである。

昭和十年十二月、かねてより話のあった尾形家との養子縁組が整い、尾形家に入り千代子と結婚した。二十四歳であった。

結婚後しばらくたって、南郷高農校の松川校長から、満州開拓青少年義勇軍の幹部になってみないかとの話があった。参加するかしないかの返事は、その場ですぐにはせずに家に帰った。まず最初に尾形の父に相談したところ「十年ぐらいならよいから行きなさい」と言われて承諾を得た。妻にも話をして納得させた。満州に渡って自分の力を存分に発揮することを決

心した。

早速に、満州移民について一生懸命に努力をしていった、南郷村の皆川七之助さんの所に行つて、いろいろと相談した。

当時は、国を挙げての国策遂行政策の一つに植民地政策があつた。「五族協和」「王道楽土建設」という大義名分のスローガンのもと「行け新天地へ、大陸満州へ」という言葉が、日本全土のはやり言葉になつていた時代であつた。それにこたえて小学校の先生までが満蒙開拓について熱心に指導をしており、生徒に行くように啓蒙していた。徳富蘇峰先生の『満州建國読本』がよく読まれていた。

二 満蒙開拓義勇軍の幹部として渡満

昭和十四年二月、義勇軍訓練所での渡満に必要な基礎訓練を終了してから、幹部としての訓練を受けるために、鯉沢村の幹部訓練所に入所した。幹部訓練はいろいろと厳しいこともつらいことも多かつたが、一生懸命に勉強した。

昭和十四年六月ごろだつたと思うが、柔剣道の有段

者は単独で渡満してもよいという命令を受けた。私は家族だけで勇躍、満州に向けて旅立つた。

新潟から北鮮航路の大型船に乗り、日本海の荒波にもまれて清津に上陸し、図們、吉林を経由して新京に到着した。大陸は思ったように雄大で、気分爽快だつた。

まず最初に拓植公社の本社に行くようにとのことだったので、新京に着いたら一番に本社を訪ねた。ところが、そこで「尾形先生は、奉天と四平街の中間にある昌図特別訓練所の勤務です」と言われ、休む間もなくすぐに汽車に乗り、南下して昌図に行き、やつこの思いで昌図特別訓練所の本部に着任した。

私は、尾山訓練所の小林済所長が中隊長である小林中隊の訓練指導教官を命ぜられて、警備指導の先生と二人で尾山訓練所に赴任し、一生懸命に尽くした。

小林中隊も三年の訓練期間を無事終了し、尾山開拓団となり開拓経営を始めることとなつた。小林中隊長は、私が全力を尽くして中隊の育成に努力していたことを分かつていたのか、私に対して好意を持ってくれ

ていたようだった。

訓練期間が終了したとき、小林中隊長から「尾形先生には、小学校も病院もあるし、お産婆さんもいる、興安東省の嫩江訓練所の方が万事に都合がよいでしょう」と言われた。家族のことを考えると願ってもないことだった。そのようなことで、私は昭和十八年四月一日付で嫩江訓練所に転勤となった。

三 訓練生を引率して再渡満

私は家族を連れて嫩江に転勤した。間もなく、しばらくちやになった一通の葉書が届いた。それには何と、驚きと悲しみが書いてあった。尾形の父が亡くなった知らせであった。

早速に、取るものもとりあえず家に帰るため、日本に向かった。法事を行い、死に目にあえなかった不幸をわびた。

しばらく家において気持ちが悪く落ち着いたところで、この機会にと内原の満蒙開拓義勇軍訓練所を訪問することとした。

本部で主要な幹部の方に挨拶をしていたら、突然に

「尾形先生は今、どちらの訓練所ですか？」と聞かれた。私は「この間まで尾山訓練所で訓練生の指導を担当していたが、現在は嫩江訓練所勤務です」と答えたところ、「それはちょうどよかった。実は三月卒業の澤井中隊と、内地で研修した岩槻中隊の二個中隊が、嫩江訓練所に入所しますので、引率をしていただけないか」と、大変な任務を与えられてしまった。二個中隊の大人数を引き連れての再渡満となり、責任重大であった。いろいろと心配も多かったが、反面心強くもあり、勇躍して嫩江に戻った。

それからは、引率してきた二個中隊の訓練生の教育訓練を担当して楽しく過ごしていた。

二個中隊の訓練生は、訓練が終了して尾山開拓団に入植した。団名は八栄会と名付けられた。八栄とは、訓練生の出身県が八県にまたがるので、そのように名付けたのだった。すなわち、京都府、滋賀県、岐阜県、静岡県、三重県、山梨県、埼玉県、宮崎県の八府県の出身者で構成されていたからだ。

四 終戦前後の嫩江訓練所の様子

昭和二十年の六月ごろになると、戦局も段々と厳しさを増してきた。訓練所の先生、職員、そして年長の訓練生にも召集がかかり、櫛の歯が抜けるように淋しくなってきた。幸いというか、私には召集がこなかった。しかし、戦争が身近なものになりつつあるという事は、まだまだ分からなかった。開拓団でも、大部分の壮年男子は動員され、残った老人、婦女子で農作業をしており、随分と苦勞、難儀をしているという話は、あちこちから耳に入ってきた。

訓練所でも、新しい訓練生が入ってきて、訓練が続けられていた。

昭和二十年八月九日、ソ連軍がソ満国境を突破して、怒濤の如き勢いで侵攻してきた。嫩江訓練所にも、いろいろな情報が乱れ飛んだ。ここから十七、八キロぐらいのところまでソ連軍が来ている。いや、もう八キロぐらい先まで押し寄せているなど、いろいろな話で対応に苦心した。どうすればよいか幹部で話し合っていたが、これといった良案がなかった。そうこ

うしているうちに、日はたつていった。

終戦の前夜、訓練所本部に幹部、中隊長が急ぎよめられた。当時、訓練所長は近藤元・予備役少将だったが、召集されて不在なので、副所長以下でこれからの行動について話し合いが行われた。情報がよく分らないので義勇隊開拓団本部に行つて情報を収集することとなり、私がその任に当たることになった。翌日、早朝に本部に行ったが、本部も混乱していて、これといった具体的な指示は何も与えられなかった。ただ、正午に東京からの重大放送があるから、それを聞いて帰所するようにとの話があった。正午のラジオ放送は、雑音がひどくてよく聞きとれなかったが、天皇陛下の終戦のご詔勅であることは分かった。

びっくりしてしまい、言葉もなかった。「王道楽土」建設のため、一途に仕事をしていたのに……という挫折感が体中を駆けめぐっていった。しかし、これではいけない、訓練所のみんなに知らせなければと、気を取り直してすぐに帰ることにした。本部から、医務室に立ち寄るようにとの指示があったので、医務室に行

くと、人数分の「青酸カリ」の包みを渡された。いよいよという場になったら、これを飲むようにとの指示だった。

訓練所を出掛ける際に、妻から、食糧があったら少しでもよいから分けてもらってくれと頼まれていたので倉庫に行ったが、もう既に荒らされていて、少ししか残っていなかった。満人の行動は素早いもので、数日前から日本は負けるということを知っていて、ラジオ放送があったら、すぐに倉庫を襲って、めぼしい物を略奪していったようだ。負けたことをしみじみと感じた最初の出来事だった。

終戦から数日後のある朝、朝鮮中隊の訓練生が「尾形先生おられますか!」と言ってきたので、「いるよ、どうした!」と本部に顔を出したら、「ソ連軍の偉い人一人と兵隊が五人、そして日本軍の偉い人(実際は見習士官だった)が見えられた」とのことだった。これは大変だと心の中で思ったが、仙台出身の志賀先生と二人で会った。

訓練所本部の幹部はほとんど召集されていなかった

ので、経理部関係の倉庫は金庫と油庫を除き、全部一人で管理していた。

ソ連軍の将校が来た目的は、訓練所の物品の徴発にあった。私は責任上、ソ連軍将校に「武器、弾薬は全部差し出す。そのかわりに、これから冬に向かうので、人道的見地から糧食や衣服はこちらにもらいたい」と交渉した。

最初はなかなかよい返事がなかったが、こっちも、これからの訓練所の人たちの生命にかかわることなので、一步も譲らずに交渉をした。人のよさそうな将校だったので、そのうちに話を分かってくれて、衣類、米、味噌などの糧食、軍手、軍足などを残してもらうこととなった。おかげで、冬に向かっの当座必要なものは配給することができた。ソ連軍とのこの交渉は、嫩江訓練所においての私の一番の思い出である。

後々での笑い話になるが、砂糖をたくさん食べ過ぎで、下痢をして困ったという人もいたようだった。

夜は、所長官舎で日本酒を一杯やりながらご飯を食べ、寝ていた。しかし枕元には、弾を込めた拳銃を

常に置いていた。

八月の末になって、ソ連軍の命令でこの訓練所から立ち退くことになった。本部前に集合し、そこから十五、六キロぐらい先の、嫩江市街まで避難行軍をするのだが、まだ訓練所の駅から汽車が通っていたので、老人、婦女子は汽車で移動することになった。私と志賀先生は、責任者となって汽車で行くこととなった。

徒歩で避難した訓練所の職員や訓練生は、出発のときには持てるだけの荷物を持って歩き出したが、大部分の私たちは、途中で半分ぐらいの荷物を道端に捨ててしまったようだった。その荷物を、満人が先を争って拾っていったそうだ。

嫩江では、旧日本軍の兵舎に収容されたが、各地から嫩江に集められた避難民で兵舎内はごった返していた。「こんなに集めて、一体どうするのか？ どうせ殺されるのだから」と、不安な空気がみなぎっていた。口には出さなかった。不安な一夜だったが、疲労が重なりぐっすりと寝てしまった。

翌日になってソ連軍からの命令で、この兵舎から追

い出されて市街地の空き家に分散して入れられた。そこで男女別々に生活することとなり、更に四十歳以下の男はシベリア送りとされ、私たちも家族と別れて貨車に乗せられた。これで家族とも永遠の別れかと思うと、涙が自然に流れてきた。四十歳以上の男性は、婦女子の世話をすることになった。

後で妻に聞いた話では、殺されるのではないかという思惑とは異なり、嫩江市街にあった日本軍の残した官舎に住み、一日に二回の高梁の食事を与えられたとのことだった。それでもお腹がすいて、満人からおかちを買って食べたり、日本軍の兵舎跡に行って、残っている梅干しや芋を拾って食べたりしたそうだ。

嫩江の駅から黒河までの間の鉄道線路のレールを、ソ連が撤去していくことになり、その作業が嫩江にいる避難民にも割り当てられたそうだ。妻は妊娠していたので、世話人の配慮で、その作業には出なかつたらしいが、健康な人は毎日毎日作業に駆り出され、ノルマが与えられて、大変に難儀な思いをしたとのことだった。

また、夜になるとソ連兵がやってきて部屋に入り込み、マンドリン銃を構えて家捜しをして、めほしい物を持っていき、その果てには「女を出せ！」と執拗に言っていたとのことで、若い女の人は、カマスを頭からかぶり息を殺して荷物のようにしていたそうで、生きた心地のしない毎日だったようだ。

だれが調べたのか分からないが、ソ連兵は子供の泣き声を大変に嫌うということが分かり、ソ連兵が来ると子供はもちろん、大人も一緒に泣き騒いだそううだ。

お米のご飯が食べたいと、四、五歳の男の子が茶碗を箸でたいていた姿が、今になっても忘れられないと、妻はそのことを思い出しては涙ぐんでいた。

嫩江は寒くて零下三十度を超す日が多く、一歳から五歳ぐらいまでの子供が大勢亡くなり死人の山ができたが、その死体が身に着けていた物をはぎ取り、市場に持って行き売っていた人もいたとのことだった。

五 シベリア行きから一転、釈放

私たち四十歳以下の男は、ソ連兵の監視のもとに、

幹部も訓練生も一緒くたになって、嫩江より黒河に向かつて歩いた。

北満の冬は早い。そのうえ食べることも満足にできず、さすが若くて屈強な訓練生たちも疲労困憊し、見るも哀れな状態だった。ようやくのことで黒河に着いた。

黒河から黒龍江を船で渡り、対岸のブラゴエンチェンスクに行った。途中、船の中で私一人いたところにソ連兵が拳銃を持って近づき、飯盒一つだけを残して、毛布、時計、万年筆などめほしい物は全部強奪されてしまった。何ら抵抗することもできず、敗戦国民の捕らわれの身の情け無さを嫌というほど味わった。

翌朝、ブラゴエンチェンスクに着いた。その時、素足で遊んでいるソ連の子供を見て驚いた。戦勝国の子供でもこのざまかと、かわいそうな気がした。

ソ連軍は、体の大きい丈夫そうな男を必要としていたのか、ソ連軍将校は訓練生を見て「こんな小さな子供は日本に帰りなさい」と言い、更に私に向かって「お前はこの子供たちを連れて行け」と言った。内心

ほっとした気持ちになった。

また黒龍江を船に乗って黒河まで戻った。さて、それからがまた苦勞の連続となったのだ。鉄道の無い所は歩き、鉄道の通っているところでは、無蓋車などに潜り込んだりして、約一カ月近くもかかって北安にたどり着いた。途中で、満人の畑で収穫した後の白菜の枯れ葉で汁を作って、訓練生に食べさせたりしたが、牛馬の死骸がごろごろしており、臭気がふんぶんとしていて食べることはできなかった。

野宿を重ねていたので、全員疲れきっており、哀れな姿だった。

六 奉天での避難民生活

北安から更に南下して、奉天までようやくたどり着いた。

訓練生たちが、駅前の給水所で代わる代わる水を飲んでいたら、そこに満人の子供が馬を連れてきて、水を馬に飲ませようとして訓練生を押しつけたので、私は怒ってその子供と馬を追い返した。

しばらくすると、満人の男が数人、馬車に乗ってや

ってきて、大きな竹竿に綱をつけたものを持って、私を叩きに来た。大変なことになったと覚悟を決めていたところに、ソ連のGPUがきて、銃で追い払ってくれて助かりほっとした。ここでも戦争に負けた悔しさをしみじみと感じたものだった。

訓練生も心配してくれて「先生、あまり無理なことはいしないでください」と言ってくれた。

奉天には、日本人の避難民の世話をする会があった。そこを訪ねて私たちを収容してもらうことを頼んだ。私たちのグループには澤井中隊の訓練生が多かったので、大部分の訓練生と共に、奉天駅の近くの富士青年学校の三階建ての校舎に収容された。別のグループは、近くの松山町の建物に入った。

私の部屋は三階で、まだ一部分は建築途中のままです。すきま風が入り寒くてたまらなかった。そのうち寒さと虱のために熱を出して床にしまいました。訓練生たちもみんな心配して、乏しいなかを、おかゆを作ってくれた。松山町に収容されていた訓練生が見舞いにきて「先生、死んでは駄目ですよ！」と励まして

くれて大変に嬉しかった。

みんなのおかげでどうにか熱も下がり、起きることができるようになったので、お礼かたがた元気になった姿を見せようと思って、松山町の収容所に行ってみたら、私を励ましてくれた訓練生は亡くなっていた。

悲しいことだった。満州での、初めての冬の寒さに耐えきれなかったのだろう。かわいそうなことをしたと今でも残念に思っている。

元気な訓練生は仕事を探しに歩いた。軍手、軍足を編む仕事に、五、六人の訓練生が雇われた。満人の子供ならば一カ月もかかる仕事を、二、三日で覚え、一人前に仕事をする訓練生たちは、頭がよいねと満人からもうらやましがられたものだった。賃金もちゃんともらっており、よい仕事だった。

また一方では、土建屋に五、六人雇われたが、まだ子供なので期待されるほど仕事ができないので、ご飯を少しばかり食べさせてもらっただけで、賃金はもらえなかった訓練生たちもいた。訓練生に大人の土方並みの仕事ができるわけがないが、それでも訓練生は一

生懸命に仕事をしていた。

無事に日本に帰り着いたならば、家族からは大事にされるから、それまでは頑張り頑張れと、心の中で励ましていた。

私と澤井中隊の先生とは、居留民会の職員としての職を得て働いた。もう一人、新潟県出身の方と二人で交代制の勤めだった。一日に二人が出勤し、一人が留守番として部屋に残るといふやり方の仕事だった。仕事の内容は、壺蘆島にある引揚者の休養のための一時収容施設の清掃作業であった。往きは北奉天から壺蘆島まで、引揚者と一緒に無蓋車に乗って行き、引揚者が船に乗ったあとの収容施設内を清掃して、帰りは徒歩で宿舎に帰った。

七 引揚げ前後の状況

昭和二十年九月ごろ、嫩江からあの避難民が奉天にきた。家族とも無事再会することができた。妻の話によると、春になると嫩江のソ連兵は引き揚げて本国に帰ったので、満人の家に手伝いに行き、一日幾らかの賃金や食糧などをもらって生活をしていたとのことだ

った。八月になると引揚げの話が出て南下することとなり、部落を転々としながら奉天に向かつて歩き続け、夜は満人の家の納屋か軒下に寝かせてもらい、朝になると早くから歩いたそう。この避難行の途中において、老人や幼児がばたばたと倒れて死んでいったそう。死んでも、焼くこともできず埋葬も思うようにできずに、そのまま道端に置いてきた人も多かったよう。

でも私は無事に家族と合流することができて幸いなことであつた。居留民会の仕事は辞めて、家族と一緒に生活することとした。

引揚げの順番がきたが、発疹チフスの患者が出たので、一カ月ぐらいそのまま奉天で足止めされてしまった。

一緒に居留民会の職員として働いていた澤井中隊の先生は、訓練生を一人でも残しては申し訳ないと、随分と苦勞して全員を捜し出して、十一月か十二月初めごろに引き揚げて行かれた。だれにでもまねできない立派な行動だった。

いよいよ引揚げが再開されて、私たち家族も壺蘆島に向かつて奉天を出発した。壺蘆島の収容施設には清掃作業で何回となく行ったが、今度は引揚者として行くのだから、気持ちは晴れ晴れとしていた。

壺蘆島では、引揚船が入ってくるまでの間、一週間ぐらい足止めさせられたが、その際には松山町出身の井上隆さんに変に世話になった。十五歳で饒河少年移民となって渡満し、開拓の初期から苦勞をした方だった。

ようやく引揚船が入港して、万感胸に迫る思いでタラップを上った。船尾の日章旗を見て、みんな感激の涙を流したものだ。出航のドラが鳴ると、みんな申し合わせたように甲板に出た。揺れる波も段々と激しくなってきたが、だれも意に介せず埠頭の方を見つめている。「満州よ！ さようなら」と叫ぶものはだれもない。口から出るのは万歳であり、埠頭に立っているソ連兵への罵声であつた。船が岸壁を離れれば、もうソ連軍は手を出せない。長かった忍苦を忘れて感涙し、抑圧されていたうっぶんを爆発させるだけ

だった。

船中で、三歳ぐらいの女の子が亡くなったが、その家族は、どうしても日本に帰って故郷のお墓に葬りたいと船長に泣きつき、取り纏って頼んだが、船長は「それではみなさんの上陸許可ができませんよ」と言われ、母親が泣きながらその亡骸を海に投げ入れるという悲惨なことがあった。私たちも、家族の願いを聞いてくれればよいがと内心期待していたが、どうにもならないことだった。

三日目の朝、九州の佐世保に着いた。いろいろな手続きがあり、DDTの消毒もあって三、四日収容所生活をして、やっと佐世保から引揚列車に乗り、故郷に向かって出発した。当時は、当然のことながら日本国内どこでも物不足で、途中の駅々でも駅前が立ち並んでいるのが見られた。また、駅のホームには浮浪児がたくさんいた。闇市とか浮浪児を見ると、ついこの間の奉天のことを思い出してしまった。戦勝国・中国での様子も、戦火にさらされた日本国内の状況も、あまり変わらないことを知り、感無量なものが

あった。戦争の恐ろしさを、しみじみと感じた。

やっと松山の家に帰り着いた。途中の荒廃した沿線風景に比べ、東北の山や、野や、川や、町は平和そのものだった。家の者も村の人たちも、昔と変わらず温かく迎えてくれた。私たちには、帰る家と土地があったことが最大の幸福だった。

引き揚げて収容所に入っていたとき、「尾形さんは帰るところがあつていいね」と言われたことがあった。本当にそうだと、帰ってからつくづく感じたものだった。せっかく苦勞して引き揚げてきても、帰る家もなく、温かく迎え入れてくれる人もない家族はたくさんいた。その人たちは、どうしただろうと考えると、手放しては喜べない気持ちになった。

それからは、家業に専念して一生懸命に働き、今日の安定した生活を得ることができた。

数年前に、嫩江訓練所の診療所で見習看護婦として働いていた岩手県の小原さんに会ったが、実家が農家なので、細い手指を真っ黒くして働いているとのことだった。

小原さんは「私もこの細い手で、皆さんの万一のときの、自決用の薬を包んだものでした」と泣きながら話してくれた。

満州に行った人々には、人には言えないそれぞれの苦労があったのだ。

やっぱり私は大和撫子だった

福島県 佐藤 チェ

私の先祖は、猪苗代湖の湖南の地に代々住んでいた。曾祖父は昔、二本松と会津との国境で争いがあったとき、手柄を立てて殿様からの褒美で一山増やしたとか、祖父は「どぶろく」を醸造して一年に米四俵分を飲み、ほとんど飯を食べなかったとか、親戚の木田少尉はノモンハン事件に出征して、戦死した大隊長の片腕を背負って陣地に戻ってきたとか、父は酒が入ると、そのことをさも自慢そうに話していた。

また、父は祖父の飼っていた種付け用の牡馬によく

乗っていたそうで、酒と馬とが大好きだった。私はそのような父と、働き者で女傑といわれた母との間に三女として生まれた。全部で十人の子でくさんで、父や母がいくら一生懸命に働いても生活は苦しかった。しかも時代が昭和の大不況であり、少しばかりの田畑を借りての小作農では、その日その日の生活は大変なものだった。

そのころ、大槻町の周辺からも満蒙開拓の国策の声にそって、一家を挙げて満州に移る家が多かった。父も元々豪気で自信満々の人柄だったので、満州に行きたい気持ちはやまやまであったようだったが、何せ十人という大所帯を抱えての決断はなかなかできないでいた。そのうちに、一番上の姉が結婚して、開拓義勇団の花嫁として満州に渡ってから、急に真剣に渡満を考え出した。

そして、とうとう昭和十七年の春に、家族全員で渡満することになった。私が教え年十一歳で小学校四年生になったときであった。

汽車に乗ったり、船に乗ったりの数日が過ぎて、や